

第二次世界大戦期の英国女性たちの文芸的公共圏

—英国 Newspaper Library 所蔵ジャーナルから読み解く—

中 條 真 実

英米文学専門 博士課程前期課程 2 年

1. はじめに

現代英国作家イアン・マキューアン (Ian McEwan) が2001年に発表した長編小説『贖罪』(Atonement)は、個人の経験・記憶レベルでの「小さな物語」と歴史という「大きな物語」双方の語りをメタ的に交錯させながら、第二次世界大戦期および当時の英国社会を虚構として語ることの問題を意識的に扱う作品である。

『贖罪』第二章では対独ヨーロッパ戦線での敗退を受け、1940年5月から6月に決行された、英・仏連合軍による、ダンケルク撤退の凄惨な様子が描かれる一方、第三章では主人公ブライオニが見習いナースとしてダンケルクから帰還した傷病兵たちの看護に当たる場面が詳細に描かれる。第二次世界大戦という歴史的過去を小説世界の中に再現するにあたり、作家は戦死者・生存者たちへの敬意をこめ、できる限り事実に即した情景・心理描写を目指したと語る¹⁾。こうしたマキューアンの作品創作への姿勢は、本作品の謝辞に帝国戦争博物館に寄贈された無名の兵士・ナースたちの日記・手紙・回想録などの一次史料に取材したと言及されている事からも窺える。歴史史料として微かにその痕跡を残した「声」と対話し、それらを凝縮・抽出した虚構の「声」を創造し、小説という新たなテキストの上に息づかせようとする作家のアプローチは、本作品の主人公であり女性作家ブライオニ・タリス (Briony Tallis) が作中でこころみる「語り」という行為にも通じる。姉セシーリア (Cecilia Tallis) とダンケルクで戦死した恋人とがやりとりした遺品の書簡を眺めながら、ブライオニは作家として歴史的過去を再解釈し、姉の「声・主体性・記憶」を虚構テキストの中で新たに「語り直し」ていく。『贖罪』において一次史料の中の「声」がマキューアン/ブライオニという二つのレベルの物語創作のプロセスに重要な影響を与えているのは明らかである。ところが従来の『贖罪』研究における「語り」分析においては抽象論のみが交わされ、物質的要素が看過されてきた印象を受ける。したがって、文学研究へ歴史的視座を導入する本

調査の試みは、現代イギリス文学研究の方法論を見つめ直すという意味でも有意義であると思われる。

報告者は現在第二次世界大戦期のイギリス文学における「女性と語り」というテーマで研究を進めており、英国女性たちがいかなる社会的背景からペンを執り文芸的公共圏に自らの「声」を響かせていったか検討したいと考えている。その場合『贖罪』に登場する「語るナース」であるブライオニの存在はどのようなコンテキストで捉えられるべきなのだろうか。そこで本調査は第二次世界大戦期における女性の文芸的公共圏と「声」との関連性を解き明かすためとくに「ナース」に焦点を絞りながら、同時期に発行されたジャーナル、個人の手記といった一次資料にあたることで、今後更なる研究領域を獲得していくことを目指した。

2. 調査目的

本調査の目的は『贖罪』の物語創作プロセスを追体験しながら、当時の女性たちの文芸的公共圏を窺い知ることのできる一次史料および国内での閲覧が困難な研究文献を収集することである。19世紀末および第二次世界大戦後に社会進出を果たした「新しい女」議論は従来文学研究でも注目されてきたが、報告者が研究する第二次世界大戦期の「新しい女」像については十分な議論がなされていない。そこで報告者は、第二次世界大戦期の「新しい女」像と当時の女性たちの文芸的公共圏を結びつけ、その関連性を一次史料から検討したいと考えた。また限られた調査期間でより具体的かつ実りある調査を行うため、『贖罪』の主人公ブライオニとその姉セシーリアが職業として選んだ第二次世界大戦期の「ナース」に焦点を絞りこれらの文献の渉猟につとめた。現地では第二次世界大戦期に発行されたジャーナル、個人の手記、手紙といった史料を閲覧し、当時の女性たちの文芸的公共圏と彼女たちの「声」との関係性を検討することを目的とした。

3. 調査結果

報告者は、2013年5月29日から6月8日の10日間にわたりイギリス・ロンドンへ滞在し、文献調査を行った。大英図書館（The British Library）分館ニューズペーパー・ライブラリ（Newspaper Library）所蔵の女性向け雑誌・ジャーナルを中心にロンドン市内の複数の研究機関にて史料および研究文献の渉猟につとめた。以下に各機関での調査概要と成果を記す。

3-1. ニューズペーパー・ライブラリ（Newspaper Library）

ロンドン郊外コリンデールに位置するニューズペーパー・ライブラリは、イギリス国内で発刊された新聞・雑誌を専門に所蔵している〔図1〕。本施設は、老朽化のため近くヨーク州の新館への移転が決定しており、2013年6月10日をもって文献の閲覧が不可能となっていた。また所蔵文献の保存状態を維持するため、一部につき一つの記事までという複写制限が設けられていた。したがって報告者は必要な文献を吟味し複写依頼をおこなうと同時に、ノートパソコンを持ち込み可能な限り記録を取ることとした。

報告者は第二次世界大戦期前後に発刊された *Woman Today* という一般女性向け雑誌、ナースを対象としたジャーナル二誌（*The British Journal of Nursing*, *Nursing Times*）を調査した。

前者は The British Section of Women's World Committee against War and Fascism から1936年から1940年に渡り発刊された。こちらの文献を解析することで、第二次世界大戦前夜および第二次世界大戦初期の時点における女性たちの反戦・反ファシズム運動へのコミットメントと、当時の女性たちの文芸的公共圏の関連性について分析を進めていく手がかりとしたい。



〔図1〕 ニューズペーパー・ライブラリ

The British Journal of Nursing および *Nursing Times* の二誌に顕著であったのは、ナースの社会的ステイタスにたいする意識の問題である。Eric Taylor が指摘するように、総力戦体制においては銃後を支えるナースの需要が高まるにつれ、英国は深刻な人材不足に見舞われていた²⁾。国家への奉仕（“Service”）の精神にあふれた中流階級の少女たちがこぞって急ごしらえの見習い看護婦（the training nurse）となる応急処置によりナースの母体数に関しては一応の解決をみせたものの、質の面では資格・知識を持たない「未登録の（unqualified）」ナースで溢れることとなったという。本調査で閲覧したジャーナルの投稿欄には、正規の看護訓練を受けたプロフェッショナルとしての矜持を持つナースたち（the trained nurse, the registered nurse）が苦言を呈する様子が見られた³⁾。ジャーナルの投稿欄という「公共圏」に参入する事によって、彼女たちは自らのアイデンティティを確保しようとしている印象を受ける。また同時に、そうした批判にさらされた側の見習い看護婦たちの投稿はあまり見られなかったことにも気づいた。ジャーナルという「公共圏」における存在感の希薄さは、実際の病棟でヒエラルキーの最下層に位置づけられたブライオニのような見習い看護婦たちの「声」が失われていたことも意味するのだろうか。今後の研究ではこうした問題についても検討することを課題としたい。

3-2. 帝国戦争博物館（The Imperial War Museum）

帝国戦争博物館は、第一次世界大戦以降の現代イギリスにおける戦争の歴史を記録する事を目的として設立された施設であり、個人寄贈の回想録・手紙・日記などの一次史料に充実したアーカイブを備える〔図2〕。報告者が訪問した時点で、同館は第一次世界大戦開戦から百周年にあたる2014年のリニューアル・



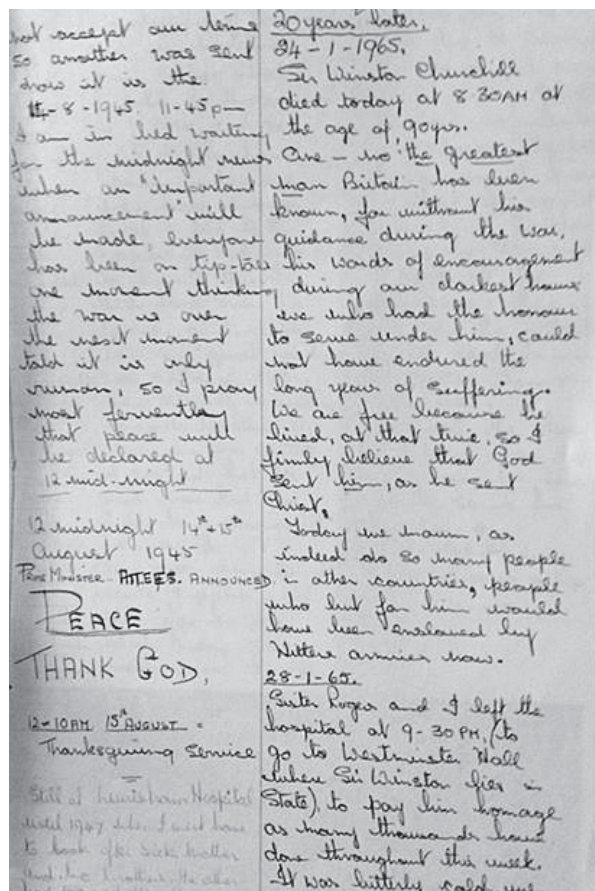
〔図2〕 帝国戦争博物館

オープンに向け改装工事中だった。残念ながら一般向けの展示を観る事はできなかったものの、目的である一次史料についてはアポイントメントを取る事で臨時の施設での閲覧が可能であった〔図3〕。手書きの史料を十分に読み解く事ができるか危惧していたが、原本のほか同館による活字原稿が添えられていたため資料の解読に非常に役立った。

文献調査では第二次世界大戦に看護に従事した人物が個人寄贈した史料に注目した。その中でとくに印象



〔図3〕帝国戦争博物館の臨時施設



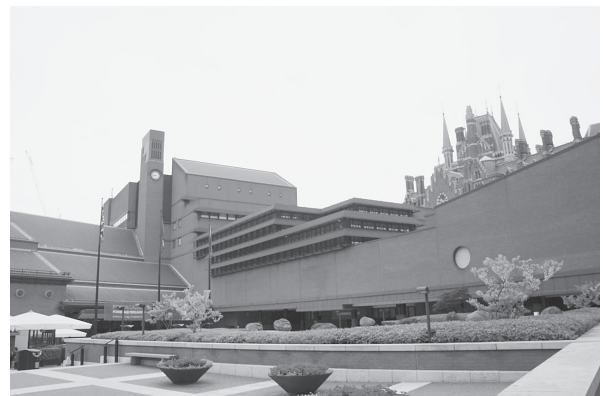
〔図4〕Miss. G. Thomas による1945年8月15日 (V-J Day) 付けの日記 (帝国戦争博物館所蔵)

に残ったのは、ロンドン市内の Highgate Hospital および Lewisham Hospital という病院で正規のナースとして働いていた Miss. G. Thomas という人物が1939年から1945年に記録した“War Diary”と題された日記である。病棟内の出来事、灯火管制下のロンドンの状況、ダンケルク帰還兵たちの手当、ドイツ軍によるロンドンの空襲の様子が詳細に描かれると同時に、彼女の日々の雑感が述べられている。日記は1945年に日本が降伏した8月15日の対日本戦勝記念日で終わられているが、そこには大文字の“PEACE”という言葉が刻まれていた〔図4〕。第二次世界大戦によって奪われていた日常が回復する事への安堵、喜びが感じとられ、当時の人びとにとって平和が何を意味していたのか改めて考えさせられる体験となった。

今回の調査の反省点は、回想録・日記へ比重を置き手紙についてはあまりカバーすることができなかったことである。次回訪問する時には、今回鑑賞できなかった一般展示とともに異なる一次史料にも触れ、新たな知見を得たいと考えている。

3-3. 大英図書館 (The British Library)

大英図書館はロンドン中心部キングス・クロス駅そばに位置するイギリス国内最大の図書館である〔図5〕。ここでの調査目的は、第二次世界大戦期の女性たちが、公的な言論の場としての文芸公共圏へコミットしたかを伝える研究文献を調査・収集することであった。従来のフェミニズム批評では、19世紀末の「新しい女」の登場や、戦後のフェミニズム運動の興隆に注目が集まっており、その過渡期にいたはずの第二次世界大戦期の女性たちについてはあまり論じられてこなかった傾向がある。また同時に、報告者が焦点を当てている第二次世界大戦期のナースに関する英語文献を国内で手に入れる事が難しい事が判明したた



〔図5〕大英図書館

め、それらの研究書をできる限り多く調査し、新たな知見を得る事を目指した。

本調査でとくに参考になった研究文献は、Cecilia Davis による *Gender and the Professional Predicament in Nursing*, Monica E. Baly による *Nursing and Social Change* の二冊である。前者はナースという職業をジェンダーの観点から分析しているのに対し、後者はナースの社会的位置づけの変容を歴史的に考察している。またその他の成果として、マキューアンが戦時中のナースを描く際に参考にしたという Lucilla Andrews の自伝的小説 *No Time for Romance* についても、折よくテキストに触れる事ができた。本調査で得た研究文献と、マキューアンのテキストとの比較・検討を行い、第二次世界大戦期の社会的状況や他の小説といったコンテクストがどのように『贖罪』のプロットに影響を与えたか分析し、作品理解を更に深めてゆきたい。

3-4. ウェルカム・コレクション (Wellcome Collection)

大英図書館近くに位置するウェルカム・コレクションは、医学研究支援団体ウェルカム・トラストによって運営されている図書館であり、医学・看護学に関連

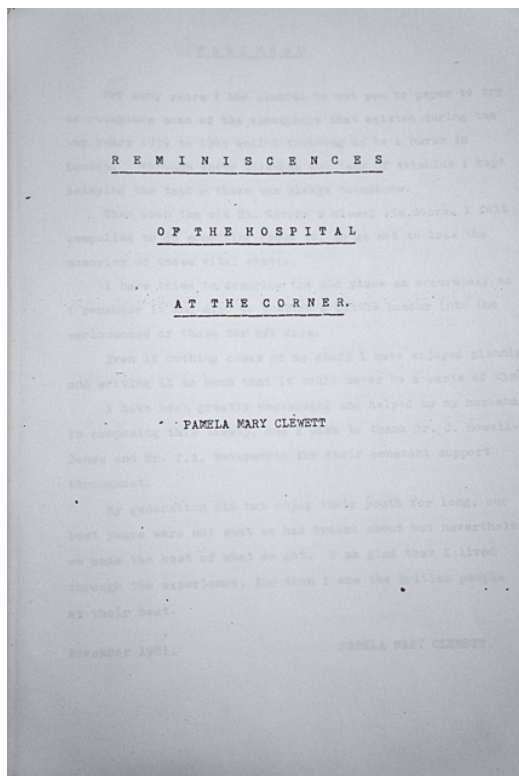
する蔵書を専門に所蔵している施設である。当初の研究計画に訪問予定はなかったが、現地に調査を進めているうちに、同館が第二次世界大戦中のナースが記した一次史料を所蔵していることが判明し、急遽訪問をすることとした。同館では閲覧室でのカメラの使用が認められており、報告者は一次史料を撮影しテキストの記録をおこなった。

同館ではロンドンの St. George's Hospital にて職務にあたった Pamela Mary Clement というナースが第二次世界大戦終了後に書き記した回想録である“Reminiscences of the Hospital of the Corner”という一次史料を閲覧した〔図6〕。8週間の看護訓練後病棟に配属され、多忙と病院内の規律に圧倒されながらもナースとしての経験を積んでいく様子が生き生きと描かれているタイプ原稿の中には、アメリカ人作家アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) が St. George's Hospital に入院した際の挿話がユーモアを交えて語られており大変興味深かった。今回は都合上この史料一点のみしか閲覧ができなかったが、医学史・看護史に関する充実したアーカイブを備えている事がわかったため今後ぜひ活用していきたいと考えている。

5. おわりに

本調査では『贖罪』における創作プロセスを追体験しながら、第二次世界大戦期の英国女性とりわけナースの文芸的公共圏を考察すべく、大英図書館の分館であるニューズペーパー・ライブラリ所蔵のジャーナルを中心に、帝国戦争博物館、ウェルカム・コレクションにて一次史料の文献調査を行った。現地でのフィールドワークを通して、戦時中という非日常のなかで無名の当事者たちが綴った「小さな物語」、そして彼らの切実な「声」が刻まれた貴重な一次史料にじかに触れることができた。そこで得られた知見、そして感覚は今後研究を進めていく上で大変意義深いものになった。

今回第二次世界大戦期のナースの文芸的公共圏にポイントを絞り調査を進める中で、総力戦が引き起こした社会的変化と女性の社会的活動領域の拡大が互いに密接に関わっていることを発見した。本調査で閲覧した *Woman-Today* 1936年12月号の口絵にも、秘書、ナースなど様々な職を得た女性たちの姿が紹介されているように、両大戦間において英国女性たちは社会的行動領域を拡大していった〔図7〕⁴⁾。しかし実際には女性たちの社会進出が手放しに奨励されたというわけ



〔図6〕 Pamela Mary Clement による回想録表紙 (ウェルカム・ライブラリ所蔵)



【図7】“Woman's Place? – Everywhere!”（ニューズペーパー・ライブラリ所蔵）

ではなく、前線にいる男性たちの空席を埋める代替物として扱われた側面が大きかった⁵⁾。したがって第二次世界大戦期の女性たちのアイデンティティは、前時代のヴィクトリア朝的「家庭の天使」と、19世紀初頭から20世紀初頭にかけて出現した「新しい女」という両極の像の間で揺らいでいたといえる。

両大戦を通じて国家的需要が高まったナースという職業にも、こうした多重の女性像が投影されていることが分かった。ナースが女性にふさわしいリスpekタブルな職業として社会的承認を得ていった背景には、男性を支える女性という前時代的な「家庭の天使」像と、戦時下において国家のために戦い傷ついた兵士たちを癒し、銃後を献身的に支える「白衣の天使」としての理想的イメージが重なったことが指摘できる。それと同時に、ナースたちが総力戦下での国家奉仕の一端を担ったことで、結果的に「新しい女」たちが目指した女性たちの社会的領域の拡大に貢献することとなった⁶⁾。現地に赴いて第二次世界大戦期に記されたナースたちの手書きのジャーナルや手紙、回想録のタイプ原稿といった史料を眺めていくうちに、「白衣の天使」とも「新しい女」とも異なる彼女たちの「声」に触れる事ができた。過酷な労働環境におかれながらも

目の前の職務を粛々と遂行するナースたちの姿をじかに感じとる事ができた体験は今後研究を進めていく上でも成果が期待できる。

しかしながら歴史的過去において発せられた無名の「彼女たち」の記憶を留めた「声」は、ともすればより大きなコンテクストとしての「歴史」に回収されぬまま、誰にも振り返られることなく忘却されていってしまう。おそらくマキューアンもこうした一次史料を取材し「声」と向き合うなかで、小説家としてそれらの「声」をいかに語るべきか、そもそもフィクションがそれらの「声」の主体性を回復させる「語り」となりえるのか、思案したのではないだろうか。本作品が投げかけるこうした問いかけに対する答えを探索していくことを今後の研究課題としたい。また本調査で得た史料を第二次世界大戦期の英国女性たちがいかなる社会的状況でペンを執り、彼女たちの「声」を綴ることと文芸的公共圏にコミットしようとしたかというテーマを追求する手がかりとしたい。本調査はイギリス現代文学研究に歴史的視座を取り入れることで新たな光を当て、今後より広範な研究領域を開拓していくうえでの重要な契機となった。

注

- 1) McEwan, Ian. “An Inspiration, Yes. Did You Copy Another Author? No.” *The Guardian*. 27 Nov. 2006. 47, Print.
- 2) Taylor, Eric. *Wartime Nurses: One Hundred Years from the Crimea to Korea 1854–1954*. London: Robert Hall, 2001. Print.
- 3) “The Flood-gates Are Open.” *The British Journal of Nursing*. May 1940. 73, Print.
- 4) “Woman’s Place?—Everywhere!” *Woman To-day*. Dec 1936. 8–9, Print.
- 5) Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar, eds. *Letters from the Front. No Man’s Land: The Place of the Women Writer in the Twentieth Century*. Vol. 3. New Haven: Yale UP. 1994. 211–65, Print.
- 6) 高橋彩. 「国家貢献する女たち——戦争と看護職改革」河村貞枝, 今井けい編. 『イギリス近現代女性史研究入門』東京: 青木書店, 2006. 269–82. Print.